

児童福祉についての主体的な学習 多様な進路の学生への対応

家政教育・金子省子

1. 授業科目の概要

学校教育教員養成課程の家政教育専修及び総合人間形成過程生活環境コースの選択科目である。家庭科教員免許状の選択科目となっている。また、保育士資格の「保育の本質・目的の理解に関する科目」群の必修科目であり、3回生後期開講で、本年度より保育士養成コースの学生も履修している。

受講生は、生活環境コース3回生12名、保育士養成コース3回生4名の計16名で、本年度は家政教育専修の履修者はいない。

授業の目的は「児童を取り巻く環境の現状をふまえ、児童福祉の理念、制度、方法、諸領域に関する課題について理解する」である。

主として学部DP1(知識・理解)に関する科目として、次の4点についての知識・理解に関して到達目標を掲げている。1. 児童問題・児童福祉の歴史的展開、理念 2. 法制度と実施体制 3. 保育、児童養護、健全育成などの諸領域についての施策の現状・課題 4. 児童の権利条約の視点から捉えた児童福祉の課題

授業形態は、講義が中心で、教科書を使用し、授業概要のレジュメ及び配布資料、一部パワーポイントを用いた。このほか、事例に関する資料を読み合わせ、グループごとにディスカッションをする時間を複数回設けた。

理念、歴史、機構、諸領域という大きな流れは変更していないが、本年度より教科書が大幅改訂されたこともあり、領域部分の順序は一部であるがこれに合わせる形で変更している。また、保育士コースの学生の履修の初年度であることから、特に保育施設関連の内容については、学生の保育所実習体験を反映できるよう配慮した。

2. 授業アンケート結果

学部DPアンケート

回収数は16。

学部DPについてDP1に主として対応する科目である。これについては学校教育教員養成課程の学生4名は全員「対応していた」と回答してい

た。また、生活環境コースの学生12名中7名が「対応していた」、5名が「どちらかといえば対応していた」と回答していたことから、DP1については、「どちらかといえば対応していた」も含めると全員が肯定的な回答だった。

このほか、学校教育教員養成課程の学生は全員がDP5についても「対応していた」と回答、DP3とDP4についても半数が「対応していた」と回答していた。一方、生活環境コースの学生ではDP2で5名、DP4で4名が「対応していた」との回答がみられた。

授業アンケート

6項目について5段階評定(a:強くそう思う b:ややそう思う c:どちらとも言えない d:あまりそう思わない e:全くそう思わない)で回答を求めた。また、進捗・難易度について5段階(a:とても難 b:やや難 c:適切 d:やや容易 e:とても容易)で尋ねた。このほか、良かった点と改善すべき点を自由記述で回答を求めた。

第14回の最後に実施し、回答者数は14名であった。

(1)「出席状況の良好さ」は、aが8名、bが4名、dが2名で、全体的に良好との自己評価で、3回生後期で就活による欠席学生が一部みられたもの、おおむね良好だった。

(2)「シラバスの提示、予定の伝達など」については、aが6名、bが5名、cが3名。

(3)「授業テーマと構成・展開の明確さ」については、aが7名、bが4名で、cが2名dが1名いた。毎回レジュメを配布したが、十分に理解できない学生もいた。

(4)「教科書・資料利用の適切さ」については、aが9名、bが5名で、肯定的な評価といえる。

(5)「進捗や難易度の適切さ」については、適切が9名、やや難が5名、容易であるとの回答はみられなかった。

(6)「意見の発表や意見交換の機会の保障」については、aが3名、bが5名 cが4名、dが

2名だった。グループで話す時間を一部設けた回があるものの、十分でないと感じた学生もいたことがわかる。

(7)「今後意欲をもって学びたい課題の発見」については、aが4名、bが8名と大半の学生が課題意識をもてたと回答しているが、c「どちらともいえない」との回答者も2名いた。

<自由記述>

「良かった点」は、14名中13名が記述しており次の3点にまとめられる。

教科書がくわしく、またそれ以外の最新の情報が伝えられた。

新聞などの具体的な事例の紹介により、内容の理解がしやすかった。

次回の教科書の該当箇所等が伝えられて予習しやすかった。

特に多い意見は の具体的事例等の紹介に関するものだった。

「改善すべき点」では、「スピードが速い」が2名、「話が多方向に進んでテーマがわかりにくい」が1名、「話し合える時間ももっとあればよい」が1名みられた。

3. 考察・次年度に向けての課題

(1)授業における情報量の確保とディスカッションの時間の位置づけ

講義を主とする授業ではあるが、問題関心をもち学習をすすめるために、可能な限り考えを述べたり話し合ったりできる時間を設けたいと考えたが、学生からは十分に意見を述べる時間がなかったとの意見もみられた。

教科書使用方法等でスピードアップできる点を見つけることや授業時間外に感想等を書かせ、それを授業時間内で出し合うなどの工夫でさらに話し合いの時間を確保したい。

(2)授業時間外学習

本年度は、子育て支援の情報(源)のあり方を体験的に把握できるよう、地域の子育て支援活動の情報に各自がアクセスし、それをもちより発表するなど、2週間程度の期間での課題提出を課した。しかし、十分に話し合う時間はもてなかったことから、次年度も継続して行い発表の時間を確保したい。

(3)知識・理解の確認方法

知識確認のための小テストを行い、また、中盤で質問事項を出させる機会を設けた。また期末のテストに向けての復習について特に注意すべき点を指摘するなどした。その結果テストの結果はお

おむね良好だった。

しかし、情報量が多いことから次年度シラバスでは中盤でのテストを設け前半部分の知識を問うこととし、期末テストでは、後半部分の知識と総合的な考察部分を問う形に変更することとした。

(4)専攻及び進路希望の異なる学生への対応

本年度は特に、家庭科教員希望や家庭科免許取得希望の学生、保育士希望の学生、特にこれらを希望しない学生、という多様な学生の問題関心をふまえた働きかけをするよう心がけてきた。

例えば、保育制度についての学習は、保育士希望者にとっては、将来の職場に関する内容となり、家庭科教員にとっては、生徒にこれについて教え、また家庭科保育実習の際に活用するものでもある。

本年度は、保育制度に関する学習の際に、保育所実習を終えた学生の体験を聞く時間を設けた。また、保育や児童虐待、母子保健領域などについて家庭科における知識の活用の見通しをもたせられるよう動機づけることを従来以上に意識して授業をすすめた。

今回目標としていた DP1 については、両課程の学生共に「対応していた」「どちらかといえば対応していた」と回答していた。また学校教員養成課程の学生全員が DP1 と DP5 について「対応していた」と回答しており、使命感や責任感など態度にかかわる面でも評価していることがうかがわれた。一方で、DP2,3,5 についての対応も回答されていたことは、上記のような多様な学生の意識に関連するものと考えられることから、さらにその質的な検討を行いたい。